

肢体不自由児教育に たずさわって

鍋島美春

私は肢体不自由児施設の中にある養護学校の分校に勤めております。毎日接する子どもたちはみな身体に障害をもち治療や訓練のために家庭を離れて学園に入園しております。

この子どもたちを見ていると幼少時よりの生活環境や両親の養育態度が子どもの人格面での特徴となって表われている事に気がつきます。そんな事について過去六年の経験から日ごろ考えている事を述べたいと思います。

—

今年の受持ちは小学部三年生で九人ですが、国語・算数については能力別指導をしています。ところが最近普通学校から転校してきたMちゃんとS君の二人が下のグループの子どもを軽蔑するような態度をとる事に気がつきました。学級内には心身とも優勢なY君もいますがそんな態度はありません。Mちゃん、S君のほかは養護学校から転校してきたAちゃんと幼稚部から学園にいる子どもたちです。

S君というのは長男の甚六というか、欲のないおっとりした子で、そのS君がほかの子どもを馬鹿にするのです。それだけに私はこれをMちゃん、S君だけの問題でなく教育界を含む社会全体の問題だと思ふのです。子どもたちは勉強々々と詰め込まれ、勉強をしていけば周囲の人からも認められます。そんなふん囲気の中で育つと世の中で大切なものは知識や学力であると考え、反面それがなければ価値がないとして見下げる気持ちになる事は容易に想像できます。Mちゃん、S君は子どもだから正直に態度で表わしましたが教育界全体の風潮を示すもので、社会の大半がそんな価値観で動いているんじゃないでしょうか。

昨年度受持った学級は六年生でした。九名中七名まで脳性まひでかなり重症ですが、知能障害はありません。それなのに一部の子どもを除いては三、四年程度の学力しかないのです。そこで残された能力を充分のばして障害を精神的に克服させたいと考え指導しました。そうした意味では普通の子ども以上に、この子どもたちには基礎学力が必要だと思つたのです。でも残念ながら効果はあがりませんでした。訓練ならともかく学習のための努力はあまり経験がないことであり、その必要さを理解させる事がむずかしかつたのです。

障害児をもつほとんどの母親は「この子は体が悪いんだから

勉強なんかできなくても」と知的な面での期待を幼少時に捨ててしまいます。子どもを連れて病院を尋ね歩き、治療に訓練に母子ともに励むのです。ある母親は家へ帰りたいと訴える子どもに「どんな事があつても歩けるようになるまでは帰つてきてはいけない」と励まします。一方では障害に対する不びんさから過保護の極端な形をとり、日常生活ではずいぶん無理をして子どもへの要求を聞きいれるのです。こうして子どもたちは心身ともに鍛える機会を与えられないまま成長し、歩ける事、手足のよく動く事を必要以上に重要視することになります。反面それ以外の事に対する関心を失いがちで、児童会の役員などに、人がらやよい意味での知的能力よりも体の動く子どもが選ばれやすいのは、子どもたちの価値観と関係があるように思えます。幼少時よりおおかあさんがどんな事で一喜一憂するかをくり返し見ているうちに、子どもの価値観が形成されていくのでしよう。中学生ともなると自分の機能回復の限界がだいたいわかってきます。しかし、それを認める事はこれまでの価値観から考ええると、最悪の場合自分を否定する事にもなりかねません。ちょうど人生について考える時期でもあり、非常に悩む者もでてきます。かつて大阪で肢体不自由児が自殺したのもこうした時期でした。



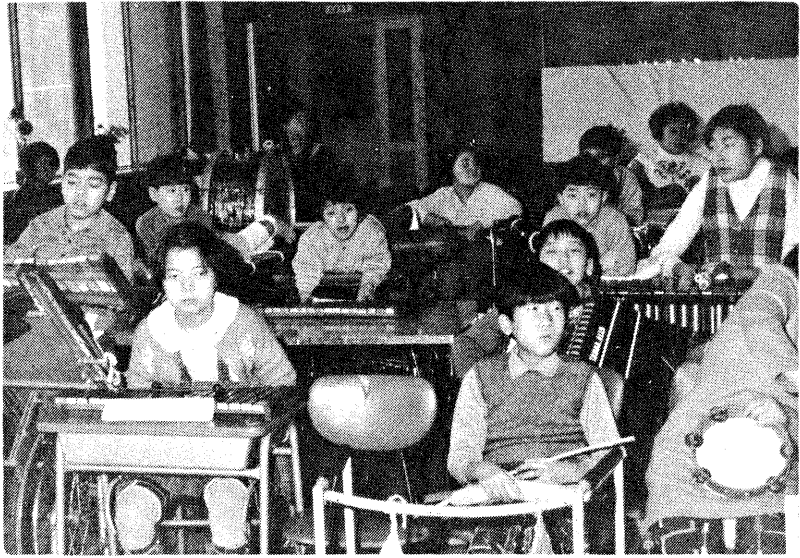
学級の子どもたち

先の普通児の知育偏重と肢体不自由児の身体機能面の偏重はどちらにしてもそれなりの事情があります。でも人間のみを強調しており、人間として本当の価値を忘れている点で同じ誤ちを犯していると言えます。

二

子どもたちの作文や日記を見ると感情の表現が乏しい事に気づきます。普通児にもありますが比較にならないほどひどいのです。日記に、その日あった運動会の事を書いたのは九人中二人でした。普通学校で三年生を受け持っている友だちの学級では、ほとんど全員が書いてくるそうです。二人のうち一人は生き生きとどうしても頑張つて勝ちたいという気持ちを書いていますが、他の一人は簡単に、した事を五、六行書いたにすぎません。

また、朝「おはよう」と言ってもすぐには「おはよう」と元気な声が返ってきません。寝なども関係してきますが、肢体不自由児と接していると、その交わりで、心からの感動というか、触れあいを感じる事が少ないのです。先に述べましたように、子どもたちは日常生活で人の手をかりる事が多く、特に母親は、子どもの日課のすべてのお膳立てまでしてしまいます。子ども



学芸会風景

はただ受動的に作られたわく内で生活しているにすぎないので。そうした経験は、ちょうど観光バスの中から眺める景色のようなもので、心に残らないのではないでしょうか。自分からしようと思っただけの行動なら、見かけは地味でも、一つ一つの事柄にもっと喜びとか悲しみの感情が動くはずだと思うのです。昨年、私たちの学園で初めての修学旅行で京都方面へ参りました。幸い現地の親の会で奉仕を申し出てくれましたので、清水寺の舞台へ上る計画を立てたのです。ところが、連絡の手違いから援助を受けられなくなり、中止案も出ました。舞台を目前にして子どもたちのたつての希望で職員と父兄ともども汗びっしょりで、とにかく上まで上りました。舞台の上から紅葉を眺めつつ飲んだ湧水のおいしさは、忘れられないそうです。旅行中第一の難関で、最も人気のあった清水寺でした。広間で存分に暴れた旅館の夜もなかなかの好評でしたが、琵琶湖の見えかくれする比叡山ドライブウェイは、ほんの通り道程度の印象しか残りませんでした。

こんなところから、肢体不自由児教育では子どもたちの自発的な行動と、思いきって心身を使い鍛える機会を多く持つ事が必要であると考えられます。運動会、クリスマスなど楽しく仕組みられた行事が多い割に子どもたちの心に残らないのはこうし

た配慮が足りなかったためだと思えます。

次に子どもたちの対人関係です。どれも関連した問題ですが、受身の生活に片寄っているというのは、対等な立場での人間関係がもたりにくい事になります。もし、普通児と障害児が腕づくでけんかをすれば、まず叱られるのは普通児の方で、双方の言い分を聞くのはその後になります。でも肢体不自由児は総じてけんかをしません。けんかというのは、お互いにその瞬間には対等で自己を主張するところに成り立つと思うのです。肢体不自由児の場合は、周囲の人から同情され、甘やかされる人間関係であり、対等に扱われる事には本人が堪えられず、自分から避けるように見えます。

この事は心理テストにも表われています。欲求不満場面での子どもの対処の仕方から人格傾向を調べるPIFスタディの結果では、相手に責任があつて自分が欲求不満におちいった時にも、率直に相手を攻める事ができず、単に不満を指摘するとか、自分が悪い事にしてしまつたり、仕方のない事としてあきらめる傾向があります。また、普通児の場合は、本当に自分が悪いと思つた時には後始末までしようとする傾向が強くなります。肢体不自由児の場合は、簡単に謝るのですが、それは言葉だけで、後始末など自分でできる範囲の弁償もしなければならぬ

という気持ちにはなりにくいのです。

こういった傾向も肢体不自由児を取り巻く人間関係の中では許される甘えのようなものでしょうが、社会一般には通用しません。健康な人格形成のためには、障害児に対しても状況に応じて償いまで要求すべきで、そうでないと対等な人間関係とは言えないと思うのです。とかく障害と混同して、物事のけじめをいいかげんにしがちですが、これは母親はじめ私たち教育者の責任で、体の障害以上に子どもの心を損い不幸にするものだと思います。

三

母親は、多くの場合、障害児をもつた事でうろたえ何とかしなければと一生懸命なのですが、少し子どもから離れて、自分のしている事がどんな結果をもたらしているか眺める余裕があれば、ずいぶん変わってくると思うのです。子どもを育てる態度に、普通児、障害児の区別はありませんが、障害児の場合は、母子ともに一種の問題場面にありますので、まっすぐのびる木も時には傾き、時には倒れる事もあろうかと思えます。木にささえをするように、一本立ちできるまではささえが必要で、その一端を私もこなっているつもりでおります。

さいごに、非常に重症でありながら、心は強くのびのびと育っている子どもの詩を読んでいただきたく思います。

(大阪府堺養護学校 大手前分校)

一生に一度の願い

岩宮 誠

ぼくは 自分でごはんが食べられない。
だから ほかの子が 食べていると、
くやしくて しょうがない。
自分で 食べられたら、
どんなにおいしいだろう。
一度でいいから、
自分の手で ごはんを
食べてみたい。



岩宮 誠くん